

S O B A 活動報告書

第 1 2 号



2015年3月

愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター

SOBA とは

SOBA (Symposium of Bullying in Aichi) は、子どもの「そばにいる」ことを活動の姿勢とする、愛知教育大学の学生を主体としたボランティアグループです。愛知県内で相次いだ「いじめ」に関する事件をきっかけに始まった「いじめを考える会」を前身とし、現在は教育臨床総合センターの研究教育活動に、学生主体の活動として位置づけられています。

子どもの「そばにいる」という姿勢を具体化するため、子どもに近い「お姉さん」「お兄さん」の立場から、時には自分たち自身の「子ども」としての体験を振り返りつつ、リアルタイムで子どもが抱える問題について学んでいます。また子どもと関わりを続けるため地域との交流を進めています。活動にあたっては、弱い立場に置かれがちな人々の力を引き出す「エンパワメント」、仲間同士の支え合いを意味する「ピア・サポート」などのキーワードによるコミュニケーションのトレーニングにも取り組んでいます。

主な活動に、毎週の「例会」での学習会の実施、地域で子どもに関わる教育機関や NPO 関係者を招いた拡大学習会、地域の教育機関や NPO で子どもと触れ合う活動（プログラムの考案や実施）があります。また、今年度からは愛知教育大学大学院の学校教育臨床専攻の方々とも連携し、新たな取り組みを進めています。

もくじ

はじめに	01
第Ⅰ部 活動報告	
1. 例会	05
2. 拡大学習会	11
3. キッズクラブ	12
4. 教育臨床カフェ	14
5. 不登校学びネットとの交流	19
第Ⅱ部 メンバー活動報告	
3年生	23
2年生	23
1年生	30
第Ⅲ部 資料	
中日新聞記事	35
キッズクラブ製作物	36
学習発表会	37
現代的な「いじめ」の理解と大人の役割	42
おわりに	51

はじめに

代表 松下夏子

今年度も多くの方の温かいご支援のもと、SOBA の活動報告書の作成を行うことができました。

前年度の引き続き、今年度もの新入生が多く入ってくれたおかげで、活動がより活発になったように感じます。例会では、様々な意見が飛び交い、毎回充実したものとなっています。例年行っているキッズクラブの活動も、準備から協力して行うことができ、本番では子どもたちと一緒に楽しんで活動を行うことができました。また、5月には不登校児童と一緒に動物園で遊ぶボランティアを行いました。実際に子どもたちと関わる活動ができたことは非常に良い経験でありました。また、大学院の学校教育臨床専攻の皆さんとの共同の活動である教育臨床カフェは今年度から本格的に始まりました。中日新聞に記事も掲載され、今後ますます活発になっていきそうです。

今年度は外部の方から様々なことを学んだ一年でした。SOBA の OB・OG の方のお話を聞く機会も多く、先ほども述べました教育臨床カフェの活動では大学院生の方、社会人の方と意見を共有することができました。

そして、今年度の新生は様々な観点から児童や社会に関する問題について考えています。前年度から行っている新生の学習発表会では、各自が関心を持つ事柄について発表を行ってもらいました。どの発表も素晴らしく、考えさせられました。新生のおかげで毎日が新鮮で、よりよい活動になっているように感じます。今後益々活発な活動を行えるようにメンバー一同頑張りたいです。

これら 1 年間の SOBA の活動をこの報告書にまとめました。1 年間の活動を振り返ることにより活動の成果や課題が見えてくると思います。また、この報告書が皆さんに SOBA の活動をご理解いただくとともに、私たちと一緒に活動するきっかけとなればと願っています。

第 I 部

活動報告

1.例会

1.1.新入生との交流

①アンゲーム 4月22日

「アンゲーム」は人生ゲームのようなコマを進めていき、止まったコマの指示に従っていくボードゲームです。しかし、このゲームには勝ち負けもなければゴール也没有せん。時間も自分たちで決めておきます。

ボードのマスには「もし、あなたがどこかへ逃げ出したい気分であれば（ボードに書かれている）ヨットに乗ってください」といった気分を聞くマスや、ボードの中央に積まれたカードをひいて質問に答えるマス、他者が質問に答えたことに対して書いておいたコメントを読み上げるマスがあります。コメントとは、「自分だったどのように答えるか」や「その答えを聞いてどのように感じたか」「さらにどのように質問してみたいか」といったことを書いておきます。唯一のルールは否定的なコメントは書かないことです。

今年度は新入生歓迎会の前に新1年生と SOBA メンバーでアンゲームを行いました。本格的にメンバーが揃うことは初めてで新メンバーも SOBA メンバーも心なしか緊張している様子でしたが、歓迎会の前の顔合わせ兼コミュニケーションをとることができました。来年度からもコミュニケーションをとるきっかけとして、新入生歓迎会に向かう前にアンゲームを行っていくことができるといいなと思います。

②ちょこっとチャット 5月13日

「ちょこっとチャット」はカードに書かれた質問に答えていくコミュニケーションゲームです。カードには2種類あって「夏休みに何をしたいですか?」といった答えやすい質問が書かれてパート①と「今の自分に何%くらい満足していますか?その理由は?」といったより深いコミュニケーションができる質問が書かれたパート②に分かれています。ルールは特にありませんが、スピーカーと呼ばれるカードに書かれた質問に答えていく人は答えたくない質問には「パス」をすることもでき、リスナーと呼ばれるその他の聞いている人はスピーカーの答えに対して評価や批判はしないようにします。

私たちは合計17名で行ったのでリスナーになる機会が多かったですが、スピーカーの答えに対して「そのような考えがあったのか…」とメンバーの知らない一面を知るととても良い機会になりました。

今年度行ったゲームの共通点は“相手の意見を否定しない”です。やってはいけないと分かっているけれど、いつも相手と話している時にちゃんと守れているかな?ゲームを通して自分のコミュニケーションを考え直すきっかけとなりました。たかがゲーム、されどゲーム。来年度もゲームを通してコミュニケーションについて考えていきたいと思っています。そしてメンバーそれぞれが対人援助をする際に役にたつといいな、と思っています。

1.2.学習発表会

10月に1年生は、各自関心がある内容についての発表会を行いました。発表した内容は以下の通りです。発表をするにあたって使用したパワーポイント資料は巻末に掲載しております。

- ・外国人生徒について
- ・いじめ
- ・知的障害
- ・自閉症スペクトラム

発表会の準備をする中で、様々な知識が増えました。また、調べたことを発表して共有することで、メンバー全員が様々な視点や問題意識を持てたと思います。

1.3.いじめ伝言板・明日が来る

朝日学生新聞社発行の朝日中学生ウィークリーには、いじめた・いじめられた体験やいじめの悩み相談、いじめに関する意見などが掲載された「いじめ伝言板」と、過去の「いじめ伝言板」をもとにしたフィクションである「明日が来る」という漫画が掲載されています。毎回の例会ではそれらを取り上げ、自分の感想や意見を出し合いました。その中で、思い出した自分の体験なども含めて話し合うことで、改めていじめというものについて考えることができました。

2014年4月6日版の朝日中学生ウィークリーの「いじめ伝言板」では、友達作りを親友に邪魔されるという記事を取り上げました。Aは、部活が同じで、小学校からの親友Bとクラスが離れてしまい、話す機会が減りました。するとBは別の子と仲良くするようになり、Aは部活内でひとりになってしまったそうです。それを嫌に思ったAは、友達作りを頑張ろうと、積極的に行動しています。しかし、Aが誰かと楽しく話していると、Bが割り込んできて邪魔をするといいます。そのために、新しい友達もいまいち作れないとAは感じているようです。Bは、Aが一人でいても何も話しかけてきてくれず、Bが他の子と楽しそうに話をして笑っているのを見て、Aは腹が立つこともあるそうです。どうしたらBに邪魔されることなく、部活も楽しめるのだろうか、という内容の投稿でした。

まず、BはなぜAと他の子の会話に割り込んでくるのかということを考えました。Aが他の子と話しているということへの嫉妬や、自分は他にも友達がいるという優越感があるのではないかという意見が出ました。その背景には、友達がいないとダメという固定概念があるのではないかと考えました。これは、メンバー間でも意見が割れました。うわべだけの友達はいらない、ひとりであることも大切だとはっきり言い切れる人もいれば、絶対ではないけど、自分も友達がいないと不安だ、Bに友達ができたのに自分には出来なくて焦る気持ちはわかる、という人もいました。また、友達をつくらなければいけないという考え方は学校教育の中で生み出されているのではないか、学校での教育が子どもたちに友達をつくらなければいけないという気持ちにさせているのではないかという意見も出ました。

また、Bは割り込んでいるという意識はないのではないかという意見も出ました。Aを邪魔したいわけではなく、ただAと話したいだけだと考えてみると、Aの捉え方の問題ではないかという話になりました。Bも一緒に話そうと考えてみたり、Bと共通の友達を作ったりして、Bが親友だからこそ、否定的に捉えないのも一つの考え方なのではないかと思いました。

今後の解決策としては、まずはBと話してみるという案が出ました。これ以上Bから遠ざかってしまうと、気まづくなってしまうと思います。Bに、新しく友達が欲しいという悩みを伝えることで、なにか変わるかもしれないのではないかと思います。また、投稿文の中にもあったように、Aは新しく友達をつくろうと頑張っています。それはいいことだから続けてほしいという意見が多く出ました。そして、その頑張りを部活以外のところでもし

てみてはどうかという案がでました。部活だけでなく、クラスや習い事など、新しく友達の輪を広げる場はたくさんあります。部活だけが A の全てではないはずです。視野を広く持ってほしいという発言が多く聞こえました。最後に、友達とは何なのかということを考えてほしいと思います。A、B は中学生で、中学では友達関係のトラブルが起きやすいです。そんな時だからこそ、友達は必要なのかいなくても大丈夫なのか、自分にとって友達、親友はどんな存在なのかを、もう一度考えてみてほしいということで、SOBA の意見としてまとめました。

友達、親友という言葉は、人によって定義も必要性も違います。そのため、この投稿文を読んで、自分だったらどうするかという今後の方向性は、人それぞれ大きく違いました。だからこそ、正答がない中で議論をすることで、自分の考え方の幅が広がるのだと思いました。私たちの意見や考えを A さんに届けることはできませんが、A さんの周りにも、悩みを共有したり、このように話し合ったりする存在がいたらいいなと思いました。

1.4.ぱれっと掲示板

ぱれっと掲示板 (<http://hotsmile.u-toyama.ac.jp/>) は、様々な悩みを抱えた人たちが、誰かに相談したいと思って書き込む掲示板です。私たちは寄せられたお悩みに対して、私たちだったらどのように返すかをみんなで考えました。

まずは相談者がどのような悩みを抱えているかを整理して、その状況を確認しました。今回取り扱った内容に関しては、相談者自身というよりは相談者の家族についてのお悩みだったので、そのお悩みの核心部分をみんなで考察しながら進めていきました。そのうえで、どのような対応策があるかを考えていきました。

返事の内容について以下のようにまとめました。

まずは、つらい環境の中で相談という手段に踏み込んでくれた相談者への感謝の気持ちと、これまでの頑張りを理解し、称賛するという気持ちを伝えます。さらに、家族のことを一番親身になって悩んで、どうかしようとしてくれていた相談者に「おつかれさま」と伝えたいという意見も出ました。

二つ目は、無理をしないしてほしいということです。家族全体でのカウンセリングを行うことで外からの風を入れることや、見守るという立場を大事にするといった対応策をいくつか述べたうえで、相談者がこれ以上無理をして苦しい思いをしないように呼びかけることが大切だという意見でまとまりました。

今回の活動の中で難しかったのは、やはり悩みの核心部分を考察することでした。いくつかのグループに分かれて話し合い、意見を出し合いましたがそれも想定の内を出ません。より相談者の立場になって物事をとらえ、その心を理解することができるように、今後の活動の中で成長していきたいです。

1.4.事例検討

今年度は、一年生が興味のある分野について学び、話し合う機会を作ろうということで、発達障害を持った子どもが学校生活を送る中でどのような壁にぶつかるのかを考えました。

とりあげた発達障害は、自閉症スペクトラム・LD・ADHD・知的障害です。ミネルヴァ書房の『ふしぎだね!?自閉症のおともだち』『ふしぎだね!?LD(学習障害)のおともだち』『ふしぎだね!?ADHD(注意欠陥多動性障害)のおともだち』『ふしぎだね!?知的障害のおともだち』(いずれもミネルヴァ書房)という本のあるページを取り上げ、学習しました。これらの本は事例を紹介する短い漫画とその解説が交互になっています。私たちは漫画のみを見て、その子はどんなことが出来ないのか、障害の特徴は何かなど、漫画を見て気付いたことをグループで話し合いました。気付いたことを全員で共有した後に解説のページを読み、発達障害のある子どもが学校生活を円滑に行うためには、先生はどのような配慮をすべきだったのかについて話し合いました。そしてその意見も全員で共有しました。

今年は一年生と二年生の人数が多いので、最初から全員で話し合うことは難しく、グループに分かれて自由に意見を言えるように工夫をしました。そしてそれをグループの代表が発表し、全員で意見を共有するという作業をすることで、多様な意見を聞き、学ぶことができました。

話し合いをする中で、発達障害を持つ子どもは普通学級に入るべきか、それとも特別支援学級に入るべきかという話が何度も出てきました。こちらも普通学級に入れるべきだという意見のひと、特別支援学級に入れるべきだという意見の人がいて、様々な意見を聞くことができました。とても深い議論ができたと思います。

来年度も、新一年生が興味を持っている分野について学ぶ機会を持とうと考えています。私が今年度 SOBA で活動をして分かったのは、やはり事例があるとイメージが持ちやすいので、深く考えることができるということです。来年度も様々な分野についてたくさん勉強したいと思います。

2. 拡大学習会

- ・「児童養護施設オリーブ」児童指導員 中野真帆先輩を招いて(2014年7月15日)

愛知教育大学の先輩であり、現在は児童養護施設で働いている中野真帆さんをお招きして、児童養護施設でのお仕事について、子どもたちの様子についてお話ししていただきました。

・児童養護施設オリーブは平成23年4月1日、定員50名で開設した施設です。生活の主たる子ども達がいきいきと生活を楽しむことが出来るよう、母性的（受容、癒し及び内面的）な面と父性的（自立促進、社会規範及び外向的）な面の関わりを通し、その自立を支援しています。社会で生活していく上で必要となること（金銭管理など）を教えることもあるそうです。

・オリーブは新しくできた施設であり、地域小規模を目指しています。しかし、まだ地域とのつながりは薄いとのことでした。

・「職員は親にはなれない」ということをおっしゃっていました。全部の職員で子どもを見ているので、担任の先生という印象が近いそうです。また、職員の入れ替わりがあるため、職員がいなくなることに子どもたちが慣れてしまっている現状があるそうです。

- ・勉強をする習慣がない子が多く、落ち着いて座ってられない子も多いようです。
- ・ほとんどの子どもに心理ケアが必要である様子です。

メンバーの中には実際に児童養護施設を訪れたことのある人もいましたが、職員さんのお話を聞くと衝撃を受けることが多かったです。児童養護施設には多くの課題があることがわかりました。中野さんも自分の理想と現実の板挟みに合い、悩んだことも多かったそうです。私たちが見たことのない視点からのお話は、新鮮であり、自分たちの将来を考えるきっかけになりました。また、社会的養護が必要な子どもたちに対して何ができるのか考える機会になりました。

3.キッズクラブへの参加

「キッズクラブ」とは、小学校から中学生の子どもを対象として、刈谷市の NPO 法人「子育て・子育て NPO スコップ」によって行われている子育て支援事業です。

SOBA は毎年このキッズクラブに参加させていただいています。今年も SOBA のメンバー4名で、2015 年 1 月 10 日(土)に行われたキッズクラブ「アイリス」での、「体験！KODOMO 遊び隊」において企画・準備し、参加させていただきました。

【日時・場所】

2015 年 1 月 10 日(土) 10:00～11:30

中央生涯学習センター（刈谷市総合文化センター「アイリス」内）

【活動内容】

今回は、4 つの工作を用意しました。

・ UFO キャッチャーゲーム

割りばしの先に糸をつけ、それを紙コップにつなげ UFO キャッチャーで言うアームの部分を作ります。それで同じサイズの紙コップを取るゲームです。

紙コップに自由に絵を描けるようにし、工作とゲームの両方を楽しめるようにしました。

・ 釣りゲーム

画用紙に絵を描き、切り取り、クリップを付け、釣るものを作ります。釣竿は先に磁石がついた糸をくくり、作ります。

UFO キャッチャー同様、釣るものを自由に描けるようにし、ゲームとして楽しめます。

・ おばけの家

息を吹き込むと紙パックの中からおばけが出てくるおもちゃです。

紙パックの上部を切り、ストローで息を吹き込めるようにした袋を入れ、ストローは外に出るようにします。おばけは自由にアレンジができます。また、紙パックには事前に白い紙を貼っておき、用意したマスキングテープや千代紙を使いデコレーションができるようにしました。

・ くるくる風車

折り紙を 2 枚使い、組み合わせて作る風車です。

先端を両手に挟んで、息を吹きかけるとくるくと回ります。折り方自体は難しくないのですが、2 つを合体させることが少し難しかったです。折り紙の色の組み合わせでおしゃ

れにアレンジできました。また、折り紙に絵を描くことでパラパラ漫画のように楽しむことができました。

【参加者の感想】

●キッズクラブには二回目の参加で、前年同様今年も楽しんで参加することができました。前年に比べて、準備段階からスムーズに作業が進んだように感じます。今年は作って遊ぶことができるか、子どもたちが自由にアレンジできるかを重視しました。特に子どもたちが自由に絵を描けるようにしたのですが、今回来てくれた子どもたちは絵を描くことよりも、テープなどでコラージュのようにすることの方が好きだったように感じます。中には絵を描くことが好きではない子もいたので、この反省を来年に生かしたいと思います。また、今回はメンバーの人数と子どもの人数が一緒であったので、一対一で子どもと接することができました。その関わりの中で、前年はわからなかった子どもの普段からの悩みや、このキッズクラブが居場所になっているように感じることもあり、前年より深く子どもと関わることができました。子育て支援は親のためでもあり、子のためでもあることを忘れてはならないと感じました。来年も参加できるようでしたら、今年の反省を生かしながら、子どもたちと関わっていけるといいです。

●同年代の子の居場所づくりのボランティアを継続してやっていたけれど、同年代の子としか関わりがないため、このキッズクラブではじめて、自分よりずっと年下の小学生の子の居場所づくりに関わった。もっと話題が合わず話が弾まないかと思っていたが、小学生たちははじめて会う年の離れた自分たちに気軽に楽しそうに話しかけてくれた。来ている子の中には学校や家庭で何か悩みを抱えていて、その話をする子もあり、遊びながらも話を聞いてもらうことがその子たちに安心をもたらすのかなと思った。

自分が普段やっている、同年代の子の居場所づくりの活動でも、来る子は自分の話を聞いて欲しい子が多い。対象の年齢は違えど、自分のやること、対象の求めていることは、近いのかなと思った。

●キッズクラブでは、子どもたちと一緒に工作をしました。子どもたちは思い思いに作品をつくっていました。作品をつくったり、つくった作品で遊ぶ姿が楽しそうでした。また、子どもたちと楽しくおしゃべりなどして、コミュニケーションがとれて良かったです。何より子どもたちに楽しんでもらえて嬉しかったです。

●自分は教員養成課程に属していますが実際に子どもたちと関わる機会はあまり多くありません。今回のキッズクラブは貴重な体験になりました。一生懸命ものづくりに取り組んでいる子どもをそばで見守るのは自分の喜びにもなりました。今後もこのような機会があった時は積極的に参加していきたいと思います。

4. 教育臨床カフェ

教育臨床カフェとは、愛知教育大学教職大学院教育臨床専攻の学生と SOBA との共同活動の総称です。昨年度の末から、少しずつ計画を進めていた臨床カフェが、今年度ついに本格的に動き出しました。

今年度は、クサオリ（クラブ・サークルオリエンテーション）と、二回にわたる LINE の企画の、計 3 回の企画を行いました。

クサオリの回では、テーブルごとに、いじめ、発達障害、など、テーマを決め、それに沿って意見交換会を行ってもらいました。初の試みで、どの程度人が来るかもわからず、不安なことだらけでしたが、想像を超えた来場者人数で、とても賑やかに話し合いが行われました。

二回目、三回目は、連続企画で、教職を目指す人向けに、子どもたちと、わたしたちの LINE の使い方についての議論をグループ別に行いました。大学生だけでなく、大学院生の方も企画、準備と議論に加わってもらい、ひとつの年代だけでない、幅広い意見交換ができました。たった 5 つ年齢が違っただけで、流行のものが違ったり、使っているものが違ったりと、どの話をしても飽きない楽しい回になりました。

今年度は、SOBA の後輩や、院生の方も増え、昨年の打ち合わせ時よりもたくさんの人に協力してもらうことができました。しかし、人数の割に来場者があまり伸びず、せっかくの良いアイデアや企画が埋もれてしまっていることが現状です。また、院生の方々は忙しく、なかなか SOBA スケジュールと噛み合わないため、せっかくの戦力をうまく使いきれていないこと、人数が多いため連絡調整もうまくいっておらず、当日誰が来てくれるのか、誰か誘ってくれた人はいるのかなど、参加人数の把握も当日までわからないこと、そのため当日に役割分担を行わなければならない、当日にやるが多すぎてしまうことも問題点として挙げられます。開催場所も、来場者へのアンケート結果によると、カフェなのだから、飲食できる場所で開催してほしいというものが多々あり、今後の課題となりそうです。

とにかく認知度を高め、来場者を増やすためには、広報が必須です。当日、企画に参加できなくても、Facebook や Twitter など、SNS を活用して広める、ビラ配りやポスターの掲示などを積極的に行う必要があります。前者は、人間関係の広い院生の方々に大いに協力していただけるとありがたいと思います。後者は、人員的にも時間的にも余裕のある SOBA が担うなど、役割分担が必要です。そのためには、院生の方々、また先生方とももっと積極的にコミュニケーションを取り、連絡調整をしっかり行う必要があります。

月に一度という限られたミーティングの中で、どれだけ良いものを作り上げることができるかは、個々の努力のみならず、その連携がうまくいくかどうかにもかかっています。来年度は、今年度の様子を踏まえながら、広報と連絡調整に大いに力をいれていきたいと思っています。

また、中日新聞さんの「草の根最前線」(2014年11月24日)で第2回目臨床カフェの活動を取り上げていただきました。巻末に新聞記事を掲載いたします。

教育臨床カフェ 2014年11月11日

「LINEでの告白どうですか?~いやいや、むしろ“別れ話”でしょ~

自分たちのSNS(LINE)の使い方について考えてみませんか」グループトークの集約

●LINEでの告白について

- ・自分からはしない。相手からされた場合はOK。
- ・本質がわからないから。その人らしさがない。メールとは違う。
- ・大切な話は面倒な(不便な)ツールの方がいいのでは。
- ・LINEは一方的、相手の状態がわからない。
- ・直接には敵わない。
- ・軽いように感じられる。本音かわからない。
- ・既読スルーされることが怖い。
- ・他の人に覗き見られるかもしれない。トラブルが発生するかもしれない。
- ・電話の方が誠意が伝わる。

●既読スルーについて

- ・トラブルもあるけど便利。
- ・スタンプで返事を返すことはOK。
- ・既読があると追い込まれている気分。

●グループLINEについて

- ・面倒くさい。
- ・グループに入っていないと情報が入ってこない。写真も送られてこない。
- ・返事が欲しいのに誰も答えてくれないと悲しい。怒りを感じることもある。
- ・わざわざ返事をするのが面倒。

●学生とLINEについて

- ・高校生→LINEで宿題を出す先生もいる。やっていないとはぶかれることもある。
- ・中学生→ゲーム的に使っている。いじめにつながるのでは。

●他のSNSについて

- ・Twitter →閉鎖的ではない。同じ趣味の人と繋がれる。話を切りやすい。他の人に見られるので本音を出せない。
- ・Facebook →本名なので人に見つけられるのが嫌。

●LINEについて

- ・LINEは関係のある人とのもの(他のSNSとは違う)

- ・ LINE が無くなったら困る。メールには戻らない。
- ・ LINE をやっていないと仲間外れにされる。
- ・ メールは使いにくい。返事が遅い。既読がないので読んでいるかが気になる。

教育臨床カフェ 2014 年 11 月 28 日

「SNS (LINE) の使い方をどう子どもたちに伝えますか」 グループトーク集約

●子どもと LINE について

- ・ グループ LINE を使っていないと疎外感がある。
- ・ 部活でグループ LINE を使うこともある。
- ・ 子どもたちは LINE の危ない部分をわかっていない。
- ・ 子どもが使うにはルールが必要なのでは。
- ・ 子どもたちの間で暗黙のルールがある。
- ・ どこまでのことを書いていいのかわからない。
- ・ 自分たちと小・中学生の考え方は違う。理解できない使い方もある。

●事例 1 について (事例については後述)

- ・ 現実での関係が信頼できるものではなかったのでトラブルが発生したのでは。
- ・ 一言言って会話を切ることはできなかったのか。
- ・ どうして B は周りの人に話したのか。

●事例 2 について (いじめについて)

・ LINE いじめがブームになっているのでは。皆がやっているから悪いことではないという認識があるのでは。

- ・ 手遅れになる前に何かできなかったのか。 EX)学級会を開く→孤独感から救う。
- ・ 子どもは大人に相談しにくい。したがって、普段から子どもと大人の信頼関係を築くべき。

・ 昔は交換ノートや手紙、メールでいじめがあった。ツールが変化しただけでやっていることは変わっていない。

・ 仲直りといじめの解決は違うのでは。いじめが無くなってもその後無視されてしまうこともある。

- ・ LINE だと家でもいじめが続いてしまう。いじめが加速してしまう。
- ・ 子どもたちにはスルースキルが必要なのでは。

●大人たちはどうすべきか

- ・ 大人が使い方をレクチャーすべきである。
- ・ 使用制限だけでは不十分ではないか。
- ・ ネットリテラシーをもっていない大人が増えた。

- ・大人が新しいことについていけない。教えられない現状がある。
- ・学校は見えないいじめを止められるか。先生やカウンセラーのあり方が問われる。
- ・買い与えた親が使い方を教えるべき。
- 刈谷市のスマートフォン使用制限について
 - ・スマホを「持つな」ということは難しい。
 - ・結局はトップダウンではないのか。
 - ・反発してしまうのでは。子どもの立場の考えを入れるべき。
 - ・LINE を終えるきっかけになってよい。
 - ・親が動いたことが使用制限を作ることにつながった。
 - ・制限の根拠がはっきりしていないので、子どもが反発するのでは。
 - ・使いたくないのに周りに合わせている子の救いになるのでは。LINE をやめる正当な理由になる。子どもの心の支えになる。
 - ・使用制限だけでは根本的な解決にはならないのではないか。
 - ・刈谷市のやり方は極端ではないのか。制限すればいいだろうと考えているのでは。
 - ・子どもは条例でもないのにルールを守っていたら、周りから何か言われてしまうのでは。
 - ・縛りが弱い。今後の調査が必要では。

<事例1>

中学生の A さんはある晩友達の B さんと個人 LINE で話をしていました。しかし、A さんは眠かったため、会話を切ってしまいました。翌日学校に行くと B さんが「A に無視された！」と怒っており、他の友達にもそのことを伝えていました。それから A さんは友達からはぶかれ、悪口を言われるようになってしまいました。

<事例2>

msn 産経ニュース

(<http://sankei.jp.msn.com/life/news/130825/edc13082511110000-n1.htm>) 2013.8.25

生徒アンケートに無視や暴力などのいじめ証言が40件以上記述されていたことが判明した奈良県橿原（かしはら）市立中学1年の女子生徒＝当時（13）＝自殺問題。遺族や関係者によると、女子生徒は生前、「ネットいじめ」も受けていた。

今年3月上旬、女子生徒は、同級生の女子がLINEに書き込んだ文面を見て「私のことなんやろな」と思った。（「んま（ほんま） うざいなあ、さよーならー」と書き込まれていた）女子生徒は昨秋から、この女子を含め仲良しだった同級生3人から無視されるなどのいじめを受けていたからだ。仲間内で文字や写真などをやり取りできるLINE。女子生徒は自分だけメッセージを読めないよう設定され、悪口を書き込まれることもあった。

3月中旬、別の女子からは、やはりLINEで家庭を中傷する書き込みをされ、学校でこの女子と激しく口論となり、担任が止めに入るトラブルになった。このころ、複数の友人

に「しんどい」「死にたい」と相談していた女子生徒は、３月２８日の早朝、マンション７階から飛び降りた。携帯電話の未送信メールには「みんな 呪ってやる」と記されていた。その直後、女子生徒を中傷していた女子は「私のせいや。私も死んだ方がいいのかな」と書き込んだ。だが通夜の際にはこう書き込んだ。「お通夜NOW」

自殺した橿原市の女子生徒の友人によると、女子生徒は無視されたグループから「KY（空気が読めない）でうざい」と言われていたという。女子生徒は「私、彼女たちに何かしたのかな」と外された理由が分からず悩んでいた。LINEがどこまで女子生徒を追い詰めたのかは分からない。ただ母親（４４）は言う。「LINEがあるから家でも気が休まらなかったんだと思う」

刈谷市のスマホ使用制限

（１）必要のない携帯電話やスマホを子供に持たせない（２）契約時には親子で約束を結び、有害サイトの閲覧を制限する「フィルタリングサービス」を受ける（３）午後９時以降は親が預かる－という内容

市教委や学校がトップダウンで決めたのではなく、刈谷市内の小中高校、警察署などでつくる「刈谷市児童生徒愛護会」が発案し、PTAと学校の連名で、保護者に協力を呼びかけた。

産経ニュースより（<http://www.sankei.com/life/news/140501/lif1405010006-n1.html>）

5. 不登校学びネットとの交流

5月25日に不登校・学びネットワーク東海の方々と共にボランティアとして東山動物園に行きました。不登校・学びネットさんは不登校や学びの場などの情報の提供、交換を目的としている団体（不登校・学びネットワーク東海ホームページ参照）です。

まず不登校学びネットのスタッフさんから自己紹介と注意事項を聞きました。その後、子どもたちそれぞれにボランティアがつくような形式で動物園をまわって行きました。途中写真を撮ったり、お昼を一緒に食べたり、ゲームをしたりなど少しずつ交流を深めていくことができました。子どもたち、保護者の方々、私たちもとても楽しく、有意義な時間を過ごすことができました。

子どもたちは始め、どこか緊張や照れがありましたが少しずつ自分のことを話してくれるようになりました。自分の好きなことについてはとてもいきいきと話してくれました。保護者の方と話していくと、子どもたちが不登校になったときや、今抱えている気持ちをそのまま話してくださいました。実際の話であることもあり、私たちが想定した話とはまた違う状況や考えていなかった内容などがあり、本などだけでは知識が全然足りていないことを改めて実感しました。

短い時間でしたが実際にボランティアとして関わるという大変貴重な体験をすることができました。机を囲んで話すだけでは得られないことも多くあります。またこのような機会を設けていけると考えが深まったり、新しい考えに行きついたりさらに個人としてもSOBAとしても成長していけると思います。

第Ⅱ部

メンバー活動報告

今年度の SOBA 活動を振り返って

3 年 濱田奈歩

今年度は前年度と同様、SOBA にとっては変革の年となりました。前年度に引き続きたくさんのお新入生が入ってくれました。今まで養護教諭養成と臨床福祉心理しかいりませんでしたが、教育科学や教員養成のメンバーも新たに加わり、さまざまな価値観を知ることができ、各々の視野が広がったのではないのでしょうか。また、児童福祉施設で働く SOBA の OB の先輩の話も聞くことができたり、不登校の子どもたちと動物園で遊ぶボランティアに出かけたりもしました。さらに、大学院生の先輩方と企画した教育臨床カフェも開催することができ、私たちにとって大きな経験となったのではないかと思います。

今年度は、私個人の話ですがさまざまな経験をする年でした。病院に実習に行った際には、心に病を抱える子どもや虐待を受けた子ども、発達障がいを持つ子どもが入院する病棟で 1 日一緒に過ごしました。また、小学校の教育実習でも、発達障がいのある子どもや家庭の複雑さから荒れてしまっている子どもとふれあう機会があり、私自身とても悩みました。SOBA の活動の中で様々な事例についてみんなで検討して、いろいろな意見を聞いてきて、私自身学ぶことはとても多かったのですが、現実事例などより厳しいものでした。しかし、SOBA で事例検討などの活動をしていなかったら、きっと私は自分の価値観でしか子どもたちを見ることができなかったと思います。私は養護教諭養成課程に所属していますが、やはり同じ養護教諭を目指す友人

と話していると、どうしても考え方が似通ってきます。SOBA は、今年度から学科の幅が広がり、今まで考えたこともなかったような考え方を知ることができ、私は多面的に子どもを見ることができるようになっていました。これは、今年度の SOBA の活動を通して私がいちばん成長できた点です。みんな個人的に SOBA の活動以外にも積極的にボランティア等に行っているようなので、活動報告や活動の中で悩んだことなどを持ち寄ってみんなで考えるという活動も取り入れられるといいかもしれません。

また、10 月まで私は SOBA の今年度の代表として活動してきましたが、10 月より後輩にバトンタッチしました。代表を務めることができたのは、活動を見守ってくださった川北先生や、ついてきてくれた後輩たちのおかげです。ありがとうございました。2 年生はとても積極的で SOBA を引っ張ってってくれるような人たちばかりです。2 年生も 1 年生も個性豊かなメンバーなので、まとめていくのは大変かもしれませんが、きっと SOBA の活動をもっともっと良いものにしてくれると信じています。これまでの活動の良い部分も残しながら、既存のものにとらわれることなく、活動の幅を広げていってほしいです。私も教員採用試験に向けてこれから忙しくなってきますが、できる限り SOBA の活動に参加していきたいです。

SOBA の活動で学んだこと

2 年 今井裕香

私が、SOBA という学生主体のボランティアサークルについて初めて知ったのは、

2年生の6月頃でした。元々心理学について興味を持っていたので、是非そのサークル活動で心理学を学んでみたいと思い、入りました。

私がSOBAの活動で一番充実しているなと感じたのは、サークルメンバーや学外の方などの様々な人と、ある問題について議論を交わすという普段の活動や、教育臨床カフェです。

自分の考えを人に聞いてもらい、人の意見も聞くことによって、様々な発見がありました。一緒に話し合う人数が多ければ多いほど、議論は多彩で豊かになり、白熱してとても楽しいです。最初、このサークルに入る前は、どんな専門知識を学ぶのだろうと思っていましたが、考えてみれば、臨床心理学なんて一つの明確な答えがあるような領域ではありませんから、答えのない問題を考え続けることになります。最初から答えが分かっている問題を考えることよりも、ずっとやりがいを感じます。

人と議論を重ねていくと、自分の視野や考え方が広がっていくのを感じます。「自分はこう考えていたが、この人はそうではない、別の考え方を持っている。」人それぞれの性格や育った環境が違うのですから、当然のことです。しかし、世界には多くの人々が生きていて、多くの考え方を持っているのだということを、私に思い出させてくれるのです。それは、将来私たちが心理学の知識を役立たせる現場へ出た時、自分の考えは持っていたとしても、それを押し付けてはいけないという教訓になると思います。

まだSOBAに入ってから半年しか経っていませんが、活動しなければ得られなかったものを、たくさん手に入れられたように感じ

ています。これからも、SOBAでの充実した活動に参加して、多くを学びたいと思います。

2年 佐野朱里

私は、今年度のSOBAの活動にあまり参加できませんでした。しかし、SOBAとしては、キッズクラブや不登校学びネットのイベントなど、学校外で活動をする機会が何度かありました。私たちの活動について、より広く知ってもらえるきっかけになり、よかったのではないかと思います。

私の中で特に印象深かったのは、「教育臨床カフェ」です。今年度の臨床カフェは二日間行いました。私は一日目しか参加できませんでしたでしたが、得るものは多くありました。大学院生の先輩方と、時間をかけて臨床カフェの話し合いを行い、準備をしてきましたが、当日まで正直不安がありました。昨年度のSOBAの活動の中でも、何かテーマを決めて話し合うことはありましたが、話したことのある学生メンバー同士で行ったものがほとんどでした。しかし今回は、大学院の先輩方や、SOBAのメンバーでない愛教生など、外部の方も混ざったグループで話し合いをし、最後にグループごと発表して、全体で共有してまとめるというものでした。そのためには、まずはグループ内で一人ひとりの考えを尊重すること、そして話し合い全体に流れをもたせる必要がありました。話し合いの中で、話を振ったり質問を投げかけてみたりして、グループ全体を見ながら話し合いを進めていく立場を経験しました。全体を見なければいけない立場になって初めて、今までの私は、

取り扱う事例を読んだりメンバーの意見を聞いたりして、自分が思ったことをただ発言していただけたと痛感しました。

昨年度の活動報告書で、私はメンバーとの話し合いを通して考え方の幅が広がる経験をしたと書きましたが、その時はあくまでも、誰かが進行してくれていた話し合いについていくような形であったと、今では思います。そして今年度、私は、一人ひとりの学びが深まるような話し合いにするための発言や行動を心掛けながら進行するという経験をしました。私が1年生の時に感じた、意見を出し合うことの面白さや、その中で得た学びを、後輩にも実感してほしいと思っていたので、少しですがステップアップできたのではないかと思います。SOBAの活動が、いじめなどの問題についての考えを深め交流するための場というだけでなく、今までの自分にはなかったスキルを身につけることができたことをうれしく思います。

来年度は、今年度よりももっと積極的に活動に参加していきたいです。私自身も、実習などで忙しくなるとは思いますが、その実習での体験なども、SOBAでの活動に還元していきたいと思っています。また、今年度は、私も含めた多くのメンバーが、それぞれボランティアを始めました。そこで学んだことや感じたことを話し合う機会をつくることも楽しみです。進級し、メンバーそれぞれが新しい学びを得る機会が増えてくるだけでなく、新1年生が入学してくることで、SOBAに新しい風を吹き込んでくれると思います。個人個人の学びや経験を、SOBAというグループで共有することで、もっと深く考えることができればい

いと思います。

2年 鈴木美帆

今年は2年生というサークルを運営していかなければいけない立場としての1年だった。

私的なことが重なり私がサークルに参加できたのは夏休みくらいまでだったが、充実したサークル活動が送れたように思う。

今年度は新入生が多数入り、新歓などサークル時間外の活動も実施することができた。また、他学科の新入生も多く、いろいろな視点からの考えを知ることができ、よい刺激となった。

また、今年からは臨床カフェも始まった。まだまだはじまったばかりだが、これからより良いものを作っていけるとよいと思う。

私が参加した半年で一番印象に残っているのは、さまざまなテーマでの話し合いである。虐待やいじめ、発達障害など様々なテーマを数人で話し合い、自分の考えを出し合った。これまでは同学科が多かったこともあり、似たような意見が多かったのに対し、今年は様々な視点からのアプローチが出されたように思う。それは私がいかに偏ったものの見方をしていたかを思い知らされた。そういう意味で、SOBAというサークルは毎週刺激を与えてくれた。

半年も参加できていない幽霊部員としてだが、今後もいろいろな意見を出し合い、高めあう場としてのSOBAの発展を願っている。

SOBA での一年間の活動を振り返って

2 年 中根悠

今年度は臨床カフェの発足により、前年度とは違った活動を行うことができたと思います。

臨床カフェではなかなか関わる機会の無い、大学院生や大学院の先生方と協力することで普段の SOBA の例会では得ることのできない経験・知識を得ることができたと思っています。内容や、宣伝方法、開催方法など考えなければならないことは多く、時間も時には人手の足りない中での準備は大変でしたがミーティングルームでメンバー間で行われる活動がほとんどだった SOBA に新しい風が吹いたと思っています。もちろん改善点はまだまだありますし、活動内容ももっと練らなければならないと思いますが臨床カフェを通して今、大学生・大学院生が考えなければならないことについて理解を深めていくことができているのではないかな、と手応えを感じています。また、中日新聞さんの「草の根最前線」で第 1 回目臨床カフェを取り上げていただいたことにより同大学生に、そして地域の方々に愛知教育大学にこのような活動を行っている団体があることを知ってもらいいいチャンスになったと思います。これからも活動内容を大学内、あるいは大学外に発信していくことが大切なのではないかと思っています。

そして、SOBA の例会もまた充実した内容だったと思っています。

ちょこっとチャットやアンゲームなどのゲームは大人数で行うことができたことにより様々な考えに触れることが出来ました。

また、ぱれっと掲示板やいじめ伝言板ではグループでの話し合いと全体での話し合いを授業以外の時間で行うことができたのは良い経験となりました。また、ファシリテーターや司会の役割になって話し合いに臨むことも私は特に場を仕切っていくことがあまり得意ではないので勉強になりました。

また、外部ゲストのお話も普段の例会とはまた違った学びの場となりました。

児童養護施設オリーブさんの中野真穂さんからは今のお仕事に就くまでの過程や児童養護施設の現状を伺ったり、SOBA の OB である刈谷市立小垣江東小学校教諭の中野真吾さんからは実際の小学校の様子を伺ったり、ご持参して頂いたレジュメを通してクラス内のヒエラルキーについて考えました。お二人のおかげで、普段の例会では考えることの無い課題を考えることができたり、現場の実情を知ることが出来ました。来年度からも専門職の方や学校関係者など私たちの知らない現場の様子を知る方からお話を伺うことができたらいいなと思います。

来年度は新しいメンバーと共に今までの内容は改善を加えながらより充実させていき、新しい試みをメンバー全員で開拓することができたら良いなと思います。

2 年 中畑杏梨

入学式の日々のビラ配り、第一回目の教育臨床カフェから、今年度の SOBA は始まりました。去年に比べて、とてもたくさんの人に囲まれて過ごした 1 年間だったように思います。春休みの時から、来年度の世代交代のことも踏まえて、今年度 1 年間の計

画を立てたおかげで、「あれ、今日は何をやるんだっけ？」と、無駄な時間を過ごすこともなく、やることがなく暇を持て余すような人も出ず、活動はとても充実したものであったと思います。教育臨床カフェが本格化し、大学生活に慣れ始めたばかりの1年生の子をこき使ってしまったことがちょっと申し訳ないです。でも、自分たちが、やろう、と言ったことに、文句を言わずに、たくさんの良いアイデアを出して、全力でサポートし、ときには司会進行役を買って出て、中心的に物事を進めてくれた、優秀な後輩たちと、自分の時間をたくさん割いて、企画を練り、推し進めてくれた同級生、サークル長、先輩にはとても感謝してもしきれません。

わたしにとってのこの1年間のサークルでの活動は、感謝することに溢れた1年間でした。ゲーム、話し合い、部屋の掃除、買い出し、ひとつひとつの行事が、とても楽しかったです。とくに印象に残ったことが、教育臨床カフェと、キッズクラブです。教育臨床カフェがどのような様子であったのかについては、そのページで述べているので、ここではキッズクラブのことについて書いていきたいと思います。

キッズクラブは、小学生の子と遊びながら触れ合う、子どもたちのための居場所づくり活動です。わたし自身が、別の場所で、中学生以上が対象の居場所づくり活動を行っているため、その差はどれほどのものか、とても楽しみでした、しかしその反面、普段同年代の子としか話をしない自分が、ちゃんと小学生の子とコミュニケーションを取れるだろうかと不安でもありました。自分なりに、子どもと遊び、話をして、楽し

ませながら、子どもたちがどのようなことについて関心を持っているのかについて知る、という目標を設定して、臨みました。心配していた子どもたちとのコミュニケーションについては全く問題なく、むしろ2人同時に話しかけてくれて、どちらから先に答えるべきか、嬉しい悩みになりました。子どもたちはわたしたちの用意した工作を楽しそうに行いながら、学校でのこと、家族のこと、自分のことをたくさん話してくれました。中には、お母さん、お姉さんとうまくいっていない子、学校で男の子にからかわれることのある子もいました。子どもたちにわたしが直接何かをして、現状を変えてあげられるわけではありませんが、わたしに自分のことを話し、それを聞いてもらうことで、自分の中にもやもやとしたものをため込むのではなく、話をするだけで少しでも心がすっきりする経験をしたり、今度は別の人にも話してみよう、聞いてもらおう、と思ってもらえたりしていることを祈るばかりです。

わたしの普段のボランティアでも、来てくれる高校生の子が、作業そっちのけで、自分の話をしたがることがあります。キッズクラブで行ったことは、わたしの普段のボランティアとあまり変わらなかったのですが、小学生と高校生、年齢は離れているのに、どちらも共通して、「誰かに話を聞いてもらいたい」という強い思いがあるように思います。その背景には、親自身に余裕がなくあまり話を聞いてもらえない状態であったり、学校で先生や友達とうまくいっておらず話をする相手がいなかったりするのだと思います。子どもたちの周りに、家庭や学校の、親や学校の友達だけでない、

子どもたちの話を聞いてくれる人の存在、地域の人だったり、このような居場所づくり活動のスタッフさんであったり、そういう人や場所がもっと身近に必要なのではないかなと思いました。

あと、本当に個人的に、今年の1年生の子の夏休みのプチ研究発表会が本当に楽しかったです。とてもわかりやすく、簡潔で、みんなの発表を聞けて、本当に嬉しかったです。そうそう、世の中にはこういう子もいて、これからわたしたちは、こういう子たちとたくさん関わっていくんだよね、という風に思っていました。つい最近、ちょっとしたことから、自分が広汎性の発達障害で、知能発達に異常のないアスペルガー症候群、さらに双極性Ⅰ型の精神疾患があることがわかりました。今まで、心のどこかで、絶対に違いうだろうと思っていたことが、自分の目の前に突き付けられて、それでも、まあ何とかなるさ、と思えるはきっと、私の周りにいるみんなが、しっかりと専門的な正しい知識を持っていて、何かあっても変わらずに接してくれる自信があるからだと思います。わたしの周りにいる、たくさんの素敵な人たちに、とっても感謝したいです。この場を借りて、みんな、ありがとう。

来年度は3年生になるので、いよいよ世代交代です。仕事面の他、サークルの部屋の、どこに何があるのかなど、引き継がなくてはならないことがたくさんあるので、自分がいなくなっても、サークルがちゃんと動いていけるように、努めていきたいと思っています。

SOBA での一年を通して

2年 松下夏子

今年度は代表として活動をさせていただき、前年以上に多くのことを学ぶことができたように感じます。今年は新たに教員養成課程のメンバーも加わり、新鮮な意見を聞くことができ、毎回の活動が非常に充実していました。

今年度からは教育臨床カフェの活動が本格的に始まりました。この1年で3回の企画を実行することができました。どの企画も無事終えることができました。11月11日に行った活動では、中日新聞に取材していただき、SOBA や教育臨床カフェの活動が外部に広まるきっかけになったと思います。しかし、まだまだ課題は多いです。外部の人を巻き込んでいきたいのですが、なかなか人が集まらないのが現状です。来年度は学部生をいかに引き込んでいけるか、大学院の皆さんと協力しながら、更にいい活動にできるよう努力していきたいと思います。

また、今年は外部の方と関わる機会の多い1年でした。例年行われている拡大学習会、キッズクラブはもちろん、不登校児童と関わるボランティアや教育臨床カフェ、SOBAのOBである中野さんのお話が聞き、学びを深めることができました。特にボランティア活動では実際に子どもたちと関わることで多くのものを得ました。表現はあまりよくありませんが一見「普通」なこの子どもたちがどうして学校に通えていないのかと疑問に思いました。それと同時に、この子たちに自分は何ができるだろうと思いい、子どもの居場所作りについても考えさ

せられました。私事ではありますが、現在児童養護施設での学習支援に参加しています。その活動でも、SOBAでの学びが役立つことは多いです。SOBAでの多くの経験が自分の糧になっていると感じる一年でした。

そして、SOBAのOGである中野真帆先輩、OBである中野先輩のお話は、現場の真実であり、現実を突きつけられたという印象がありました。自分はまだ視野が狭いということを実感し、自分の中だけで考えるのではなく現場を見て、他の人の意見を聞いて更に学んでいく必要があると感じました。今後はボランティア活動などをSOBAとしてより活発に行えるようになれるといいと考えています。

去年は何と無く活動に参加していることが多かったですが、今年はメンバーと協力しながら活動をより良いものにしていくことができました。反省点も多いですが、精力的に活動でき、学ぶことの多い1年でした。先にも述べましたが、今年は10月から代表という立場で活動に参加しましたが、自分の力不足さをひしひしと感じました。他のメンバーや川北先生のおかげでここまでやっていくことができました。来年度はより自分自身もスキルアップできるように頑張りたいと思います。そして、来年度もSOBAとして精力的な活動ができるように努めていきたいです。

SOBAの活動を振り返って

2年 森ありさ

私は今年度のSOBAの活動を通して、一番印象に残っているのは、発達障害の子の

について考える話し合いと、教育臨床カフェの活動だ。

まず一つ目の方についてだが、ADHD、LD、自閉症スペクトラム、といった発達障害の子を取り上げた絵本を読んだり、発達障害に関するテーマを取り上げたりして、グループごとにその子の気持ち、先生の接し方などを考え、話し合い、最後にそれぞれ発表する、といった活動だ。

私は将来、子どもに関わる仕事をしたいと思っている。もしこの夢が叶ったら、おそらく発達障害を持つ子と接することはあるだろう。しかし、いざそのような子と接することになった時、また接していくうちに「この子は発達障害なんじゃないか」と思ったとき時、どのように接すればよいか考える機会がなかったとしたら、困ってしまうだろう。しかし、このSOBAでの活動を通して、それを考えることができた。また、自分で考えるだけではなく、それを発表して、他の人の意見も聞いて、賛否の分かれる部分で議論もした。このように、発達障害の子について考え、それを共有する時間は、将来役に立つだろう有意義な時間であった。またこの話し合いでは、交代で司会を行う形をとったが、私は司会進行のようなことが得意ではないので、そこで司会をしたことはいい経験になった。

もう一つ印象に残ったのは、教育臨床カフェの活動だ。大学院の方と行う活動で、主に学校内の学生に参加してもらうことを目的とするものである。

まず4月には、主に新入生に向けた内容だった。新入生の不安や悩みを主にテーマにしてグループに分け、そのグループで話を共有する、という場を作った。思いのほ

か人が来てくれて嬉しかったが、話が盛り上がるどころ、そうでなかったところがあったそうだ。もっと目的が明確な活動にしたいとも思った。

その次の教育臨床カフェでは、今多くの人が利用している SNS の「LINE」をテーマにした話し合いを行った。これは 2 回に分けて行われたが、私は定期的に 1 回目だけ参加した。このとき来てくれた学生は少なかったが、話し合いは盛り上がり、LINE について考えるいい機会になった。話し合い自体はよかったので、この教育臨床カフェの活動を、今後どう学校内に広めるか、どうしてももっと多くの人に参加してもらえるかを考えるのが、この先の課題であると思う。

一年間の活動を振り返って

1 年 伊藤江里奈

私は始め SOBA に入るつもりはなかったのですが、友達が入ると言ったのであまり気が進まないながらも見学に行きました。しかし私は以前からいじめや不登校などに興味があったので、活動内容に興味を持ち、SOBA に参加させてもらうことになりました。

SOBA での活動は学科の講義とは異なり、自ら考え、問題を解決するためにはどうすれば良いか導きださなければいけません。また事例を通していじめや不登校を考えるため、より臨症的な考え方が必要とされます。そういう意味では、とても勉強になった一年だったなあと感じています。

SOBA の活動の中で最も印象に残っているものは、発達障害についてみんなで考え

たことです。自閉症スペクトラムや LD、ADHD、知的障害について、その特徴や学校生活を行う上で発生する問題について話し合いました。講義で発達障害について学ぶよりも深く学ぶことができ、障害を持つ子どもについて理解することができました。二年生と一緒に話し合い、学ぶことで、一年生よりも知識を持つ先輩たちと知識の共有ができたので、来年度も私たちが新一年生に様々なことを伝えられるといいと思います。

SOBA のメンバーは現在、臨床福祉心理コースに在籍する生徒が主体です。しかし、将来教育現場で実際に働く教員養成課程の学部生が SOBA の活動に参加しないことには、SOBA が愛教にある意味はないと思います。来年度の目標は、教員養成課程の学部生に SOBA の活動をもっと知ってもらうことです。SOBA に参加する学生が増えることももちろんですが、教育臨床カフェなどの活動に参加してもらったり、来年度すぐというわけにはいかなくても大学祭で展示を行って SOBA について知ってもらったりと、もっと気軽に SOBA の活動に参加することができると思います。この一年参加して、SOBA はとても良い活動をしていると思ったので、もっと SOBA の存在や活動を内外部に発信していくことができるといいな、と感じました。

来年度の後期からは、私たち一年生が SOBA を引っ張っていかなければいけません。今まで先輩たちに甘えてばかりだったと感じます。来年度は今年度以上に、精力的な活動ができる SOBA でありたいと思います。

SOBA で1 年を過ごして

1 年 永田美里

私は「不登校」、「いじめ」についてより学びたいと思い SOBA に参加しました。SOBA の活動を通してこの1 年間は多くのことを考え、さまざまな意見・考えを聞くことで多くのことを学ぶことができました。自分にとっては不登校学びネットでのボランティア活動、発表会が特に印象に残っています。

ボランティア活動では子どもたち、その保護者の方々と一緒に動物園をまわりました。実際関わることに少し不安を抱えながらでしたが、会話を重ねるにつれてそういった不安を取り除くことができました。このボランティア活動より以前に不登校についての本を読んでいましたが、本だけでは得られない視点や考えを新たに手にする場とすることができました。ここで得たものをこれからの SOBA で活用していきたいと思っています。

発表会では「いじめ」について取り上げました。いじめについての資料は多く、それだけ今まで考えられてきたことであると改めて思い、そしてなくしていくために自分たちができることは何なのかを考え直すきっかけになりました。また、他のメンバーの発表を聞くことでそのメンバーの考えを知ることができました。

参加して1 年目で内・外ともに内容の濃い活動ができたように感じます。来年度は今年度以上に自分自身が成長できるような取組をしていきたいと思っています。

SOBA の活動を振り返って

1 年 別司真希

先輩方やほかの学科の人たちとの意見交流は学ぶことだらけで、とてもためになりました。私だったら思いつかないことも、SOBA の活動を通してたくさん知ることができました。さらに、いじめや発達障害など、今まであまりかかわってこなかった分野の知識を得ることもできました。学校で実際に起こっている問題についてや、お悩み相談など、具体的な内容を知れたことで、より理解が深まったように思います。

大学院生さんと合同で行う臨床カフェでは、メンバー以外にも参加していただき、SNS についての話し合いをしました。まだまだ参加者が確保できず小規模なものになってしまいましたが、今後はより力を入れて、たくさんの人に参加してもらえよう頑張っていきたいです。

SOBA で1 年間を過ごして

1 年 米阪朱里

私は、入学前のクラスタイムにて SOBA の存在を知りました。そこから流されるまま入った SOBA ですが、様々なことを学ぶ良い機会となりました。

いじめや不登校、発達障害を取り扱った例会では、今まで知らなかった知識を得ることができました。同時に他のメンバーの異なる視点からの意見に触れて、新たな問

題意識を持つと共に自分の無知さを知りました。結果として自分の中の勉強意欲に火をつけることになり、今となっては良い切片となったなと感慨深いです。

外部からのお客様のお話や、外部で開催されている講座などに参加することとても勉強になりました。現場でのリアルな経験を伺える機会は本当に貴重なものだと思います。普段の活動だけでは得られないことをここで学ぶことができました。

他にも様々な活動をしましたが、どれもタメになる良い経験でした。先輩方に頼りきりという形での参加でしたが、来年度からはより積極的に SOBA の活動に参加したいと思います。

第Ⅲ部

資料

中日新聞記事

2014 年 11 月 24 日朝刊

(この記事は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。)

キッズクラブ 製作物（キッズクラブの活動詳細は本文をご覧ください）

・ UFO キャッチャーゲーム

割りばしの先に糸をつけ、それを紙コップにつなげ UFO キャッチャーで言うアームの部分を作ります。それで同じサイズの紙コップを取るゲームです。

紙コップに自由に絵を描けるようにし、工作とゲームの両方を楽しめるようにしました。



・ 釣りゲーム

画用紙に絵を描き、切り取り、クリップを付け、釣るものを作ります。釣竿は先に磁石がついた糸をくくり、作ります。

UFO キャッチャー同様、釣るものを自由に描けるようにし、ゲームとして楽しめます。



・ おばけの家

息を吹き込むと紙パックの中からおばけが出てくるおもちゃです。

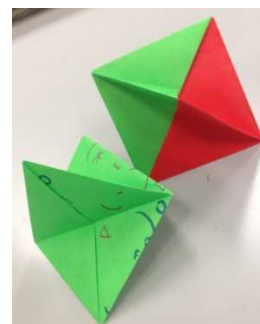
紙パックの上部を切り、ストローで息を吹き込めるようにした袋を入れ、ストローは外に出るようにします。おばけは自由にアレンジができます。また、紙パックには事前に白い紙を貼っておき、用意したマスキングテープや千代紙を使いデコレーションができるようにしました。



・ くるくる風車

折り紙を2枚使い、組み合わせて作る風車です。

先端を両手に挟んで、息を吹きかけるとくるくと回ります。折り方自体は難しくないのですが、2つを合体させることが少し難しかったです。折り紙の色の組み合わせでおしゃれにアレンジできました。また、折り紙に絵を描くことでパラパラ漫画のように楽しむことができました。

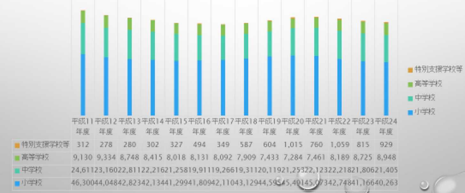


外国人生徒について

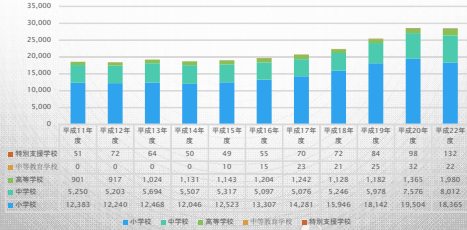
伊藤 江里奈

1. 日本における外国人生徒の実態

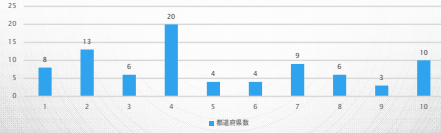
公立学校に就学する外国児童生徒数の推移



日本語指導が必要な外国児童生徒数



都道府県別小中学生に対する施策の実施状況(複数回答、平成19年度)

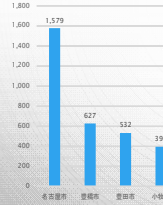


- 担当教員(常勤)の配置
- 児童生徒の母語を話せる相談員の派遣
- 上記12以外の指導協力者の配置
- 担当教員の研修
- 受け入れに際し、特別な配慮を行っている学校の有無
- 研究協力校(地域)の指定
- 就学・教育相談窓口の設置
- 保護者用就学ガイドブックの作成・配布
- 就学案内の発給
- その他

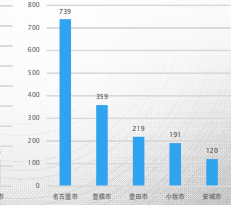
2. 愛知県における外国人生徒の実態

- 愛知県は、日本語指導が必要な外国児童生徒数が**全国一**。
- 一位の愛知県は5,623人なのに対し、二位の神奈川県は2,990人、三位の東京都は2,705人、四位の静岡県は2,485人、五位の大阪府は1,823人と、他の都道府県に大差をつけている。
- 外国人生徒の母国語として最も多いのは、ポルトガル語(ブラジル人等)。
- その他、中国語、フィリピン語(フィリピン人)、スペイン語(中南米の国々の人)などを母国語とする生徒が多い。

外国児童数(小学校)



外国人生徒数(中学校)



3. 外国人生徒がぶつかる壁

教育の壁

- 母国と日本の義務教育の期間や、勉強の進み方の違いから、小中学校に就学しない
- 日本では高等学校に進学することが一般的であるのに、それを知らない親が、進学させない
- 親への情報提供も足りていない
- 日常生活程度の日本語は使えても、『学習言語』として日本語を使えない

(中卒認定試験は日本語で行われる)

など

4. 政府(文部科学省)の対策

現在行われている取り組み

- 外国人児童生徒等を受け入れる学校における日本語指導の充実を図るため、日本語指導を行う教員の加配措置を実施しており、平成20年度予算においては全国で985人を計上し、その給与費の3分の1を負担している。
- 独立行政法人教員研修センター(NCTD)において、外国人児童生徒の指導にあたる教員や校長、教頭等の管理職等を対象に、外国人児童生徒の日本語指導や外国人児童生徒を受け入れた場合の学校運営等に関する「外国人児童生徒等に対する日本語指導指導者養成研修」を実施している。

日本語教育の壁

- ・以上より、『学習言語』としての日本語教育は不可欠
 - ・現状として、日本語指導が必要な外国人児童生徒は増加→そのうち85.6%しか受けていない
 - ・大阪大学留学生センター非常勤講師の埋根淑子は、外国人児童生徒への日本語教育の形態の種別をその研究論の中で述べている。
 - ① 校内での取り出し指導
 - ② 在籍学級への入り込み指導(チームティーチング)
 - ③ 拠点校・センター校方式(在籍校からの通付)その上で、②についてはボランティアは特に違和感なくクラスに迎えられていたが、周りの生徒にどのような心理的影響を与えているのかは、具体的な調査結果が得られなかったため、今後の課題だと指摘している。
- また、③については、外国人生徒と在籍校の心理的な距離が見受けられた他、①に比べて生徒に對してきめ細かな対応がしにくいとしている。

生徒指導の壁

- ・外国人児童生徒でも、暴力行為やいじめ、不登校等の指導上の問題や、LD、ADHD等の発達障害の問題は生じていると指摘されている
 - 言葉や行動様式の違いから、日本人生徒より見極めにくい
 - 気付いたとしても、対応を相談できる外国人児童生徒を対象とした専門家、専門機関が少ない
 - ・外国人児童生徒を受け入れるにあたり、他の生徒にも配慮をし、外国人の児童生徒の長所や特性を理解させ、共生しようとする心を育てることが必要
 - 国際文化が理解できず、いじめが起こってしまう
 - ・外国人児童生徒ではなくても、ハーフ(片親が外国人)の生徒、留学生の生徒に対してもいじめが起こっている
- 例) 香川県の中学校で、パキスタン男子がいじめられ、重症
鹿児島県の中学校に留学したアメリカ人男子がいじめられる

今後の方策

- 指導内容・方法の改善・充実
 - ① 学校入学前の初期指導教室の開催
 - ② JSLカリキュラムの普及・定着
 - JSLカリキュラム
JAPANESE AS A SECOND LANGUAGE(第二言語としての日本語)カリキュラム(外国人児童生徒の初期指導から教科学習につながる段階の指導を支援するための教員等の指導資料)
 - ③ 日本語能力の測定方法及び体系的な日本語指導のガイドラインの研究
 - 学校における指導体制の構築
 - 外国人児童生徒の指導にあたる教員や支援員等の養成・確保等
 - ① 外国人児童生徒の指導にあたる教員や支援員等の配置の推進
 - ② 外国人児童生徒の指導にあたる教員や支援員等の人材の養成・確保
 - 外国人児童生徒の進路指導や生徒指導等の諸問題への対応
 - ① 進路指導の充実等
 - ② 生徒指導上の諸問題等への対応
 - 国際理解教育の推進
3. 「ようこそ日本の学校へ」、「にほんごをまなぼう1〜3」などの教材や教員用指導資料を発行するとともに、教科指導等を通じながら外国人児童生徒の学習言語能力の育成を目指す「JSLカリキュラム」小学校編及び中学校編を開発し、ワークショップを開催するなどしてその普及を図っている。
4. 外国人の就学支援や拠点校を中心とした外国人児童生徒等の学校での受入体制の在り方について調査研究を行う「帰国・外国人児童生徒受入促進事業」を実施している。平成20年度からは、都道府県や市町村における先進的な取組を踏まえつつ、学校入事前の外国人の子どものための初期指導教室(プレクラス)の実施や外国語の分かる地域人材を支援員として学校に配置する事業を新たに実施している。

5. 自分の意見

- ・日本語教育は大きな問題であり、外国人児童生徒の全員が日本語教育を受けられるような体制を整える必要がある。
- ・いじめが起きるのは、日本人の外国人に対する偏見？
- ・国際化の時代、お互いが快適に生活するために、国際交流の授業を設けるなど、幼いころから外国の文化や外国人について学ぶ機会を設けてほしい。
- ・外国人が公立学校にALTではなく教員として勤めることを支援しては？

参考資料

- ・愛知県ホームページ 愛知県の外国人児童生徒数の状況 平成25年度外国人児童生徒数(平成25年5月1日現在) [HTTP://WWW.PREF.AICHI.JP/0000069809.HTML](http://www.pref.aichi.jp/0000069809.html)
- ・文部科学省ホームページ 日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況 [HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/B_MENU/HOUODOU/20/08/08073011/001/001.HTM](http://www.mext.go.jp/B_MENU/HOUODOU/20/08/08073011/001/001.HTM)
- ・文部科学省ホームページ 外国人児童生徒の適応指導や日本語指導について [HTTP://WWW.MEXT.GO.JP/B_MENU/SHINGU/CHOUSA/SHOTOU/042/HOUKOKU/08070301/005.HTM](http://www.mext.go.jp/B_MENU/SHINGU/CHOUSA/SHOTOU/042/HOUKOKU/08070301/005.HTM)
- ・財団法人自治体国際化協会 多文化共生ポータルサイト「ともに学ぶ」 [HTTP://WWW.CLAIR.OR.JP/TASUNKA/PORTAL/LEARN/ENTER_EDUCATION.HTML](http://www.clair.or.jp/TASUNKA/PORTAL/LEARN/ENTER_EDUCATION.HTML)

- ・ホームステイと留学 MNCC 南日本カルチャーセンターホームページ デミアン君の日本留学断片記 13.いじめ [HTTP://WWW.MNCC.JP/DEMIAN/DEMIAN13.HTM](http://www.mncc.jp/DEMIAN/DEMIAN13.HTM)
- ・埋根淑子「中学校における日本語教育の枠組みと課題—JSL教育としての日本語教育へ—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第8号、2004 [HTTP://WWW.KIKOKUSHA-CENTER.OR.JP/RESOURCE/RONBUN/KAKURON/32/032.HTM](http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/ronbun/kakuron/32/032.HTM)

いじめ

永田 美里

いじめの定義

- ◆辞書
自分より強い立場にあるものを、肉体的・精神的に苦しめること
- ◆学際
単独または複数で、単独あるいは複数の特定人に対して、身体に対する物理的攻撃又は言動による脅し、いやがらせ、侮辱、差別、差別等、心理的圧迫を、反復継続して行うことにより、苦痛をあたえること(ただし、悪友グループや悪友関係による対立競争事象を除く)
- ◆文科省
自分より強いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手に深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実を確認しているもの、なお起こった場所は学校の内外を問わないものとする

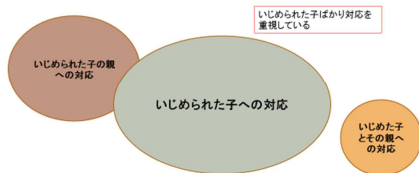
いじめの現状

- ◆文科省が発表する「いじめ」の数字は減少傾向にある
→実際にそうなのか？
- ◆学校側も対応している
→対応しきれているのか？

なぜ対応できないのか？

- 教師
 - ◆証拠や証言がころもとない
 - ◆悪いかたがわからない
 - ◆非難されたくない→ 何もできない
- いじめに対する考え方
 - ◆いじめられる側になにかあるのでは
 - ◆子ども同士の問題だから大人は介入しない→ 何もしない

今までの対応



どうしたらいいのか

- ◆いじめた子への対応を充実
 - いじめられた子だけでなく、いじめた子へのケアも重要
 - 学生時代にいじめをしていた人の多くが年を経るにつれてそのことがトラウマになり、対人恐怖症になるケースもある
 - 再発を防止
- ◆問いたださない
 - いじめられた子には「安心と知識」を
 - いじめた子には「社会的な知識や常識」を

いじめとは...

今後いじめ問題は取り上げられると思います。
その際に学校や教育委員会の対応を見ていこうと思います。
いじめは悪いこと、はもちろんです、子ども同士でやっていることも犯罪になりうるという社会的常識をみんなで共有しなければなりません。
今でもいじめを軽く見ていた人がいますが、昔とは違って変わり犯罪行為にまで手を染めていました。
それに歯止めをかけられるのは今の教師(大人)たちです。
世間がもっと関心を持っていくような活動を期待すると同時に、自分からも何か発信していければと思います。

出典・参考

- ◆なだ いなだ『いじめを考える』岩波書店 1996年
- ◆内藤 朝雄『いじめの構造』講談社 2009年
- ◆大畑 憲一『いじめについての大誤解』近代文芸社 1996年
- ◆内藤 朝雄『＜いじめ学＞の時代』柏書房 2007年
- ◆尾木 直樹『いじめっ子その分類と対応法』学陽書房 1996年

知的障害

1. 知的障害とは？

- ・知的機能に障がいがあり、なんらかの支援を必要とするもの。ほとんどが**発達期（18歳未満）**で生じる。
- ・障がいの度合いによって**軽度、中度、重度、最重度**に分けられる。
- ・原因は8割が**不明**で、残りの2割は染色体の異常などの**先天性の知的障害**や出産時の酸素不足やトラブル、乳幼児期の**高熱**などが原因とされている。

2. 障がいの度合いとは？

・知能指数（IQ）によって区分される。

知能指数（IQ）＝

精神年齢（発達年齢）÷ 生活年齢（実年齢）× 100



3. 特徴

①軽度の場合

- ・言語の発達が遅い。
（18歳以上でも小学5～6年生程度の学力にとどまることが多い。）

②中度の場合

- ・言語、運動能力の発達に遅れがみられる。
- ・生活するうえでの支援が必要な部分が出てくる。

③重度の場合

- ・言語、運動能力の発達が遅い。
- ・日常会話に限度がある。
- ・情緒が不安定になる。
- ・生活をする上での介護、支援が必要。

④最重度の場合

- ・言語はあまり発達しない。
- ・身の回りの処理はほとんどできないことが多い。

⑤性格行動の特徴

受動性：自分から進んでものごとをやろうとしない、人の指示に従うことが多い
不安傾向：恐れや心配を持ちやすい
衝動性：興奮しやすい。すぐにかっとなる
硬さ：融通がきかない
固執性：しつこくてこだわる

被暗示性：いいなりになりやすい
忍耐力の欠如：我慢強さに欠ける
未熟さ：幼稚な行動がみられる。甘える、注意を引こうとする、すぐに泣く、などを示す
逃避傾向：自分の世界に閉じこもる
フラストレーション耐性の低さ：不満を抑えてがまんすることができにくい
自己概念の非現実性：自己の能力を正しく評価することができない

4. 教育

問題点
学習で得た知識や技能が断片的になりやすい



実際の生活に応用されにくい

ポイント

- ・より**実践的**な教育
- ・**成功経験**をもたせること
- ・**具体的、実際の**な内容の指導

4. まとめ

引用・参考

- ・知的障害児者の心理的特性と心理的問題について『知的障害児者の心理的問題と指導』
(http://www.ipc.hokusei.ac.jp/~zoos05/kamoku/tokusi/IL_amentia.htm)
- ・ふぁみえーる『知的障害の特徴』
(<https://famiell.net/knowledge/learn/developmental-disorder/a60>)
- ・発達障害療育の糸口『発達障害と知的障害の違い』
(<http://dditoguchi.jp/aozintellectual-disability.html>)
- ・障害のある子どもの教育について学ぶ『知的障害のある児童生徒の特性と教育的対応』
(<https://www.nise.go.jp/portal/elearn/zidouseitei.html>)
2014.10.4閲覧

おわり

1. いじめの社会問題化といじめの現実

1.1 いじめ問題の歴史

- ・子どものいじめは、自殺事件の報道によって問題化してきました。大きなもので1986年の中野富士見中学の事件、94年の大河内君の事件（愛知県西尾市）、2005-6年の福岡県と北海道、12年の滋賀県大津市の事件があります。
- ・では、昔と今のいじめに変化はあるのでしょうか。「昔はいじめられても自殺などしなかった」「これほどひどいいじめはしなかった」という声もあります。しかし実際には、「いじめ自殺」という言葉が用いられていない時期にも同様の事件や、酷いいじめはあります（朝日新聞の例〔資料1〕。藤子不二夫A『少年時代』のエピソード）。また自殺する子どもの割合が現在高いわけではありません。戦後10代の自殺率が最も高かったのは1950年代です〔資料2〕。

1.2 報道と統計からみるいじめ

- ・いじめについての報道例を見てみましょう（映像）。人を死に追いやったとされるいじめには誰もが怒りを感じるように思われます。いじめ防止対策推進法では「児童等は、いじめを行ってはならない。」（第四条）と定めています。
- ・ただ、すべてのいじめが絶対的な「悪」といえるでしょうか。いじめの加害や被害の経験率の調査によれば、両方を経験していない子どもは1割しかいません〔資料3〕。これほど多くの子どもがいじめにかかわっており、また双方の立場を経験する子が多く、立場も入れ替わっていることが推察されます。
- ・ここまで考えるといじめの経験率は、いじめの定義によって左右されることに気づかれると思います。文部科学省の調査では「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」と定めています〔資料4〕。
- ・一方で、長期的で頻繁ないじめを「深刻ないじめ」と定義すれば、中学校の男子で経験率が高いという調査結果があります。いじめのリスクは思春期に高まります〔資料5〕。

1.3 発達段階といじめ

- ・思春期の子どもは他者からどう見られるのかを意識するようになります。また大人より

¹ この原稿は、東海市社会福祉協議会における保護司対象の研修会向けの資料を編集しました（2015年1月15日）。

も友人からの承認を強く求め、友人のなかでどんな地位（ポジション、ステータス）を占めるのかが関心事になります。

- ・「スクールカースト」という言葉が数年前から知られるようになりました。学校内で「イケてる（格好いい、カワイイ）」「影響力がある」「ノリがいい」などの価値観によって子どもの上下関係が定まります。
- ・大人と異なり、職業や社会的役割の裏付けがないまま横並びの集団生活を送ることが、地位への過剰な敏感さに結び付いているとも考えられます。また仕事や学業ではなく、一緒にいること自体が目的の集団を作りがちであるため、同じような行動を取らせる仲間同士の圧力（同調圧力、ピア・プレッシャーと言います）が高まります。〔資料 6〕
- ・友人同士の地位の確認、集団での同調圧力が組み合わさると、「集団で連帯するための排除（仲間はずれ）」「集団内部での勢力争い」などが生まれます（後者の例として、大津市のいじめに関する第三者調査報告書は、子ども同士の「共依存」的關係を指摘〔資料 7〕）。どちらも、思春期に多くの人を経験するものであり、成長途上において必要な経験とも考えられます（もちろん、それを経験してどう成長するかが問われます）。

2. 現代のコミュニケーションといじめ

2.1 コミュニケーションを求められる子ども

- ・いま、日本の子どもの夢は何でしょうか。また周囲は子どもに何を期待するのでしょうか。「立身出世」「ガリ勉」といった言葉が古めかしく聞こえるのに代わり、柔軟性やコミュニケーション力が求められる社会が到来したといわれ、その中身や背景には多くの議論があります（本田 2005）。
- ・一つの物差しで人より抜きんでることよりも、変化する状況に柔軟に適応することを求められる社会、また右肩上がりの成長が望めない社会では、身近な人との「いま・ここ」における関係が余計に重視される傾向も生みます。思春期における同調圧力が社会的な背景からも高まります。

2.2 パーソナルメディアの浸透（インターネット、携帯、SNS など）

- ・インターネットや携帯などのパーソナルメディアが浸透したことも、コミュニケーションの在り方を変えます。見知らぬ他者との接点を持つ可能性や危険も取りざたされますが、子どもの場合、リアルな人間関係のある人との通信を行うことが多いようです。
- ・高校生や大学生の場合、入学前から合格者の LINE グループが設定されることで「知らない人との通信」が始まります（竹内 2014）。他方で、顔見知り同士でいじめがある場合、家庭に戻ってからも逃れられない、匿名掲示板に何を書かれるか分からない、などの悩みにつながります。

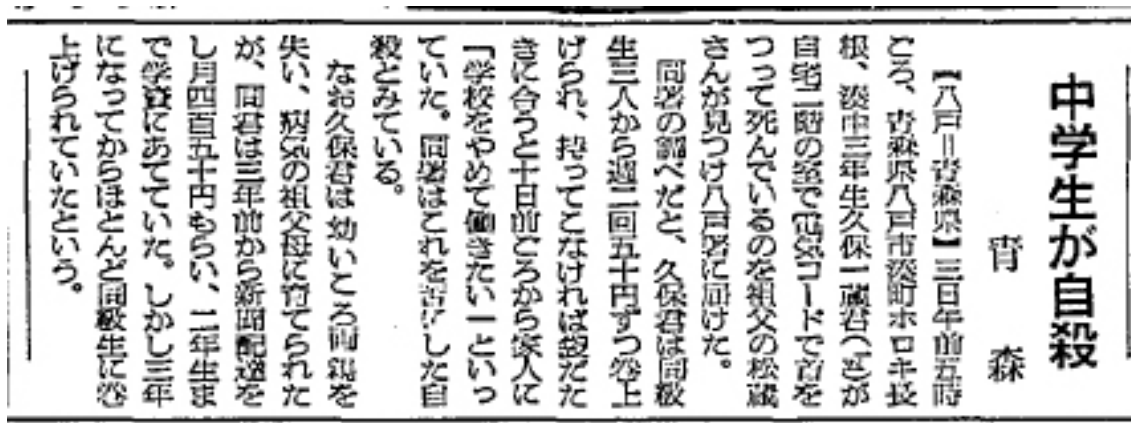
2.3 パーソナルメディアに関して大人ができること

- ・竹内（2014）は、以下の 3 つを挙げています。①何かあったら相談に乗る、②自分は知らないけれど「知っている人を知っている」ことを伝える、③どう対処するか、子どもに相談しながら進める（暴走しない）。
- ・①は、大人が先回りせずに「困った」時に相談できるようにしておくことを意味します。子どもの世界には大人と異なる常識があり、大人のルールで縛っても聞き入れられません。しかし、子どももお互いの集団圧力に困り、内心では大人からの規制を求めていることがあります。②は、スマートフォンや LINE の詳しい仕組みを知らなくても、専門的な相談窓口を知っているだけで役に立つことを意味します〔資料 9〕。③は、子ども間のトラブルに大人が出てくることで、却って状況が悪くなることを子ども自身が最も恐れていることを意味します。

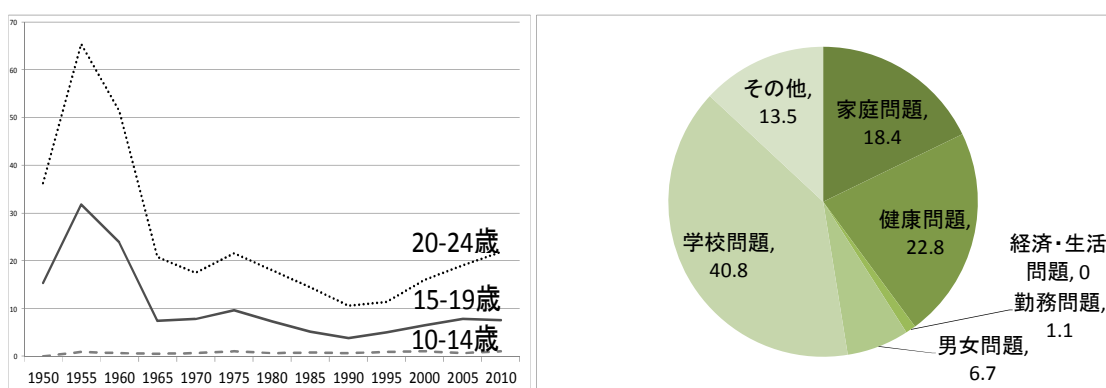
3. 加害・被害にブレーキをかけるために

- ・いじめの被害・加害が非常にありふれたものであり、時には成長途上に当たり前の経験であることを確認しました。その一方で、エスカレートすると、子ども同士にも止められないものです。「ありふれている」「悲惨な結果」の間のどこかで、ブレーキをかける働きかけが必要になります。
- ・人権意識：自分と相手の双方を大切にするコミュニケーションが、いじめを防ぐと考えられます。そのヒントが「安心」「自信」「自由」という人権概念であり、自分の権利を侵害されることも、相手の権利を侵害することも許してはいけません。この概念では、行為を受けた側の「心身の苦痛」という定義とは異なり、行為の表面上の特徴にとらわれない侵害をキャッチすることができ、被害者が認めなくても侵害を疑うことができます〔資料 10〕。
- ・「けんか」「からかい」「注意」などとの区別：子どもの発達途上に当たり前に経験することと、いじめを区別できなければ有効にいじめを発見することはできません。〔資料 11〕
- ・犯罪との重なり：いじめと呼ばれる行為のいくつかは、犯罪の定義に当てはまります。〔資料 12〕

〔資料 1〕 1963 年の中学生の自殺報道：『朝日新聞』 1963 年 5 月 3 日夕刊より



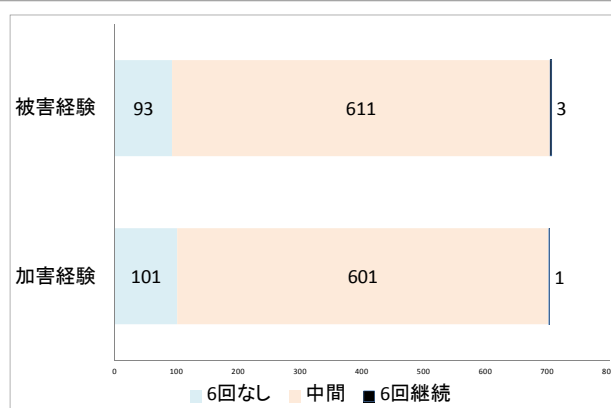
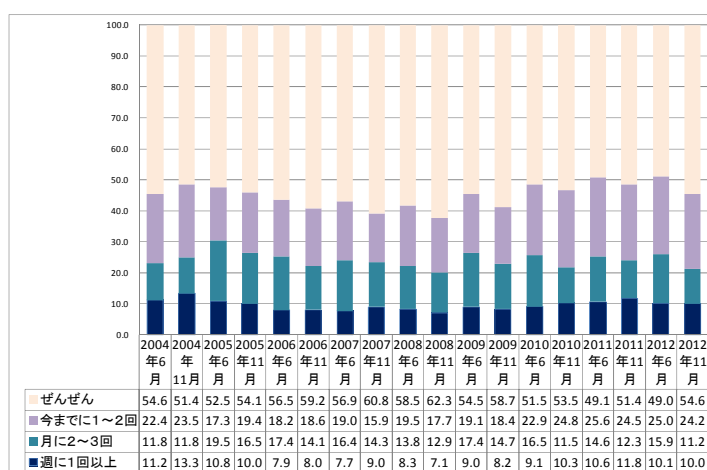
〔資料 2〕 子どもの自殺



左図：人口 10 万人当たりの自殺による死亡者数の推移：厚生労働省「人口動態統計」平成 23 年より

右図：文部科学省「子供の自殺等の実態分析」にみる自殺の背景（小中高校生）

〔資料 3〕 小学校 4 年生から 6 年生（男子）の「いじめ」経験率（仲間はずれ・無視・陰口）：生徒指導・進路指導研究センター（2013）



小学校 4 年生から 6 年生（男子）のいじめ被害・加害経験の分類：生徒指導・進路指導研究センター（2013）

〔資料 4〕「いじめ」の定義

文部科学省の平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」：本調査において、個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとする。

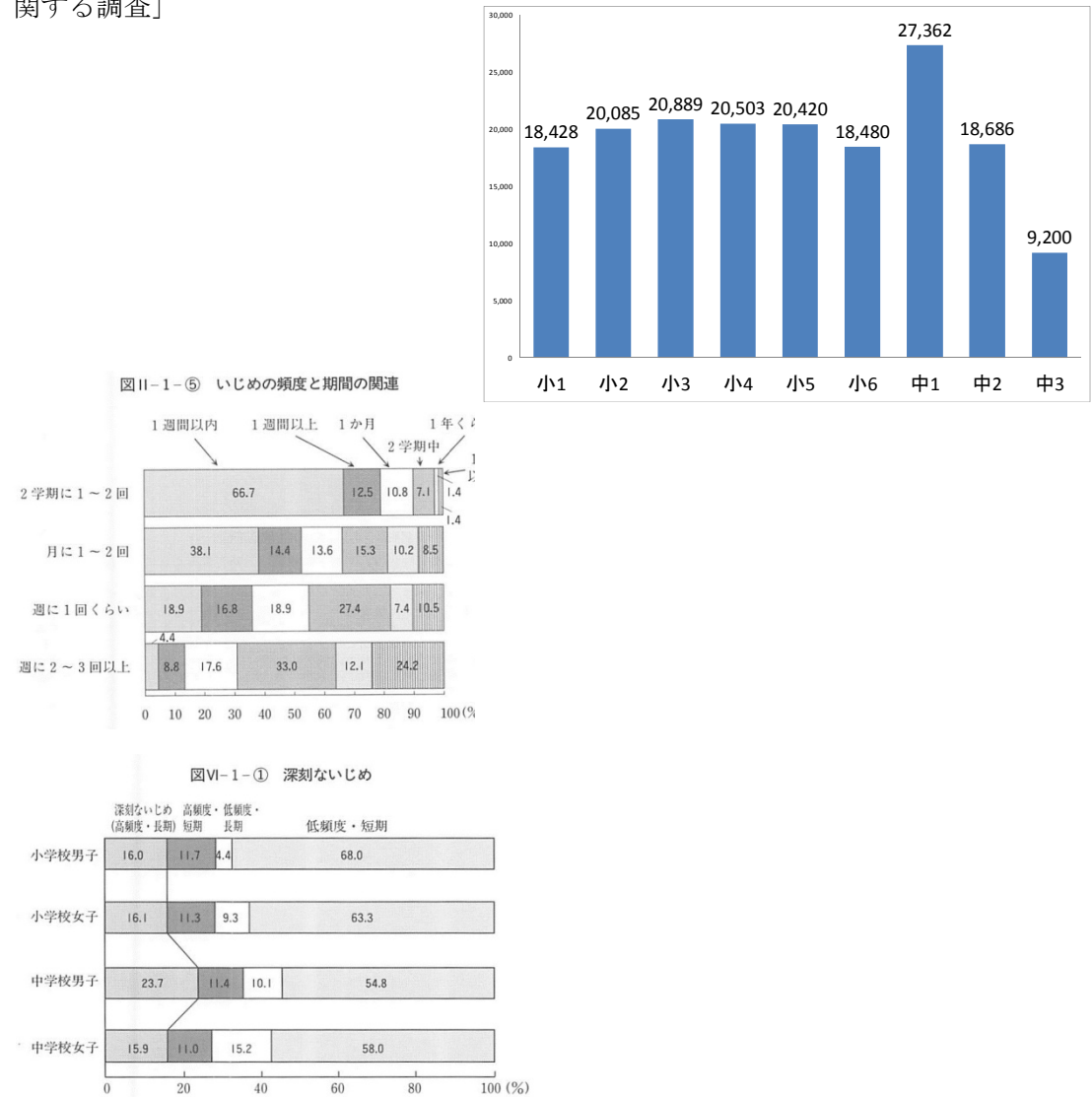
「いじめ」とは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。」とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。

「いじめ」の中には、犯罪行為として取り扱われるべきと認められ、早期に警察に相談することが重要なものや、児童生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるような、直ちに警察に通報することが必要なものが含まれる。これらについては、教育的な配慮や被害者の意向への配慮のうえで、早期に警察に相談・通報の上、警察と連携した対応を取ることが必要である。

いじめ防止対策推進法（第二条）：この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

警察白書のいじめ定義（武田 2012）：いじめは、単独または複数の特定の人に対して、身体に対する物理的攻撃または言動による脅かし、いやがらせ、無視等の心理的圧迫を反復継続して与えることにより、苦痛を与えること。

〔資料 5〕 中学校でのいじめ：平成 25 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」



森田ほか（1999）

〔資料 7〕 集団圧力について

集団圧力：集団メンバーに対して集団の規範に同調するよう働く強制的な影響力。凝集性の高い集団ほど、メンバーの言動を統制しようとする集団圧力は高くなる。規範から外れるメンバーに対して、周りのメンバーが働きかける直接的圧力と、メンバーが自発的な同調の必要性を感じる間接的圧力の二つの形態がある。（有斐閣『心理学辞典』）＊同様の語に「同調圧力（ピア・プレッシャー）」がある。『生徒指導提要』の「青年期の心理と発達」の記述も参照

所属欲求のゆがみ： 私の前の学校にちょっとヤなやつがいたんです。A とします。そ

の A は、私と友人が楽しくお話ししているといつも勝手に入ってくるんです。内輪だと楽しく話せることも知らん人が入ると話しにくいじゃないですか。そういうこともあって、よく会話に沈黙が流れたりしたんです。あまりいい気分じゃないですね。（「進研ゼミ」中学講座編 1997）

所属と承認欲求のゆがみ： 「あの子は「高い」子で、あの子は「低い」子。あの子は「上」であの子は「下」。あるいは、「イケてる」「イケてない」なんて言葉でもかまいません。学校生活を過ごす中で、人間関係の「地位の差」のようなものを感じたことはなかったでしょうか。なぜ、ギャルグループは、あんなにも幅をきかせているのか。なぜ、サッカー部は教室で実権を握っているのか。なぜ、モテる子はモテない子を馬鹿にしたり、見下したりしてもいいような空気になっているのか。なぜ、おしゃれで異性とも気さくにおしゃべりができる、まさに今どきの若者的な子たちは、アニメの話を楽しそうにしている子を教室全体に響き渡るくらいの大きな声で馬鹿にしたりできるのか。例を挙げるときりがありません。」鈴木（2012）

〔資料 8〕 共依存

共依存：アルコール依存症治療の場面で、特に家族にかかわる臨床から観察、提唱された生活および問題解決の機能不全パターン。背景には、アルコールの作用や患者の要因のみでなく、患者をとりまく人々（特に家族）に特徴的に認められる状態が存在するという認識がある。＊『大津市立中学校におけるいじめに関する第三者調査委員会の調査報告書』も参照

〔資料 9〕 ネットの犯罪・迷惑行為の相談先（竹内 2014）

警察関係 都道府県警察本部のサイバー犯罪相談窓口等一覧
(<http://www.npa.go.jp/cyber/soudan.htm>) 各都道府県にはサイバー犯罪を専門に扱う部署があります。全国共通「#9110」にダイヤルすると、近くの警察本部の相談センターにつながります。

消費生活センター（国民生活センター） お金にまつわる相談は、消費生活センターが詳しいです。消費者ホットライン全国共通「0570-064-370」

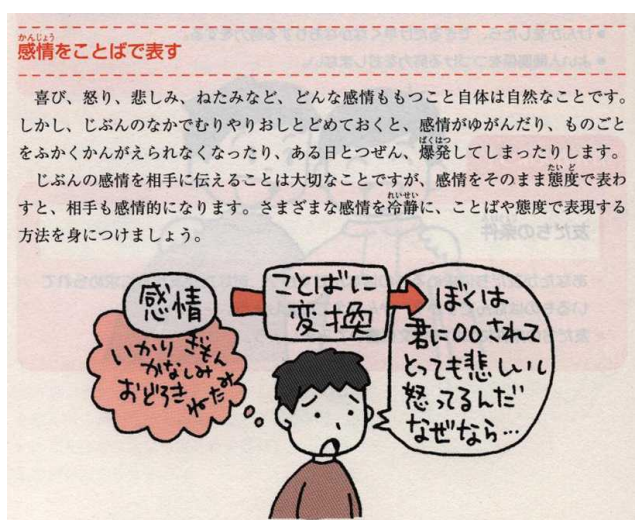
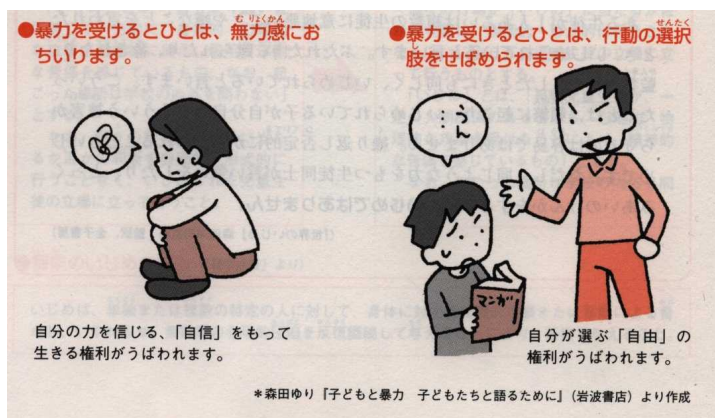
法務省インターネット人権相談受付窓口
(<http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html>) 相談フォームに必要事項を記入して送信すると、後日最寄りの法務局からメール、電話または面談により回答してくれます。＊子ども用の「SOS-e メール」もあります。

違法・有害情報相談センター (<https://www.ihaho.jp/confirm/confirm.html>) 違法・有害情報に対する削除等の対応方法を案内してくれます

インターネット・ホットラインセンター (<http://www.internethotline.jp/index.html>) 違法サイトや有害サイトを通報すると、警察への情報提供や削除依頼等の送信防止措置等の対応を行ってくれます。

迷惑メール相談センター (財) 日本データ通信協会 (<http://www.dekyo.or.jp/soudan/>)
迷惑メールの相談や情報提供を行ってくれます。

〔資料 10〕 いじめにブレーキをかけるために (武田 2012)



〔資料 11〕 あそびやゲームといじめ（武田 2012）



〔資料 12〕 犯罪といじめ（武田 2012）



文献

- 河村茂雄（2007）『データが語る①学校の課題』図書文化社。
- 進研ゼミ」中学講座編（1997）『学校で起きていること——中学生たちが語る、いじめの「ホント」』ベネッセコーポレーション。
- 鈴木翔（2012）『教室内（スクール）カースト』幻冬舎新書。
- 生徒指導・進路指導研究センター（2013）『いじめ追跡調査 2010-2012』国立教育政策研究所。
- 竹内和雄（2014）『スマホ時代に対応する生徒指導・教育相談（月刊学校教育相談 2014 年 7 月増刊）』ほんの森出版。
- 武田さち子（2012）『子どもとまなぶいじめ・暴力克服プログラム——想像力・共感力・コミュニケーション力を育てるワーク』合同出版。
- 本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版。
- 森田洋司ほか（1999）『日本のいじめ——予防・対応に生かすデータ集』金子書房。

おわりに

川北稔（教職実践講座）

今年度も SOBA は新入生の勧誘に力を入れ、1 年生メンバーの参加が活発にみられた結果、報告書にも 10 人以上の個人活動報告を掲載することができました。この報告書に原稿を寄せていないメンバーも含めて、学業やボランティア活動を通じて、子どもに寄り添う学習や取り組みを継続してくれているはずです。

今年度は大学院学校教育臨床専攻の大学院生らと「教育臨床カフェ」を企画・開催し、秋には中日新聞の紙面に取り上げられるなど、新しい展開もみられました。教育臨床カフェについては、教育臨床学講座の三谷聖也先生に、発案から企画運営までご尽力いただきました。

不登校や「いじめ」に始まり、発達障害の特性を持つ子、家庭の貧困の影響を受ける子など、学校で弱い立場に置かれる子どもの課題が新しく現れ続けています。カウンセラーやソーシャルワーカーなど、子どもにかかわる専門職の充実も社会的課題になっています。SOBA には養護教諭養成課程や臨床福祉心理コースの学生の参加が多く、特に近年は臨床の分野を目指す学生が活躍しています。

教員養成課程に在籍する学生については、もしかすると課題を抱える子どもの活動で存在が薄れがちではないか、と思いきなりになります。ただ一方で、私が所属する教職大学院（教職実践専攻）では、学級や授業のユニバーサルデザインに関心を持つ大学院生が多く見られるようになりました。中央教育審議会では、事務職員やスクールカウンセラーなどの専門職が教員と一体となって教育課題に対応する「チーム学校」の仕組みについて検討が始まっています（2014 年 11 月）。教育、臨床、福祉などの分野をつなぐ新しい呼びかけ方を考えていくことで、SOBA や臨床カフェの活動が充実していくに違いありません。

大学内外からのご支援を受け、今回の報告書でまかれた種が、次号以降で芽を出すことを楽しみにしています。

SOBA 活動報告書 第 12 号

編集・発行 愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1 番地

SOBA 連絡先

FAX 0566-26-2713

E メールアドレス empower@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

発行責任者 愛知教育大学 教職実践講座 川北 稔

SOBA 代表 松下 夏子

表紙絵 海野 由希子

伊藤 梨香

発行 2015 年 3 月